

CCD検閲者資料から検証する

《寄稿》

GHQの検閲者 Kinoshita Junji はあの木下順二か

山本武利 早稲田大学名誉教授
やまもと たけとし

検閲者資料の探索へ

私はアメリカ国立公文書館で2008年、GHQに雇用された日本人の検閲者のボックスを見つけたが、その量がかなり膨大であるため、その所在のファイル番号のメモにとどめていた。それを2013年に国立国会図書館のフィルムで確認して複写した。まとまった形で入手できたのはCCD(民間検閲局)の東京関係のものだけで、時期も1948年6月、9月、12月、1949年3月、6月、9月の6か月間に限られていた。それでも延べ

1万4千名の名前が記載されていた。

その資料をNPO法人インテリジェンス研究所の諜報研究会で公表した。ちょうど執筆中の著書『GHQの検閲・諜報・宣伝工作』(岩波現代全書、2013年)にも入手資料の一部を掲載した。また「CCD雇用の日本人検閲者の労働現場」(『Intelligence』16号、2016年)という資料解説も公表した。さらにNPO法人インテリジェンス研究所のホームページ <http://www.npointelligence.com/> にその人名一覧を公開するだけでなく、最近それを時期別、職種別で検索できるようにリニューアルした。



写真1 キノシタが働いた東京中央郵便局の職場(1948年)

そのホームページをご覧ください

分かるが、名簿の人名は全てローマ字記載である。その日本名の特定は困難極まる。私は木村洋らの協力を得て、150名ほどの日本名を確定したにすぎないのが現状である。

この名簿のなかに Kinoshita Junji の次のような情報（出所 List of Japanese Personnel employed as of Mar. 1949, 国立国会図書館憲政資料室(C157273 など）がある。

CCD資料I

	職種	給与(円)
1946年11月4日	採用	
1948年6月	DAC	4110
1948年9月	Tech Exp (DAC)	5280
1948年12月	"	"
1949年3月	DAC	7970
1949年6月	Tech Exp (DAC)	"
1949年9月	記載なし	

Kinoshita Junji (以下、キノシタ) は1948年6月〜1949年6月まで5回名前が出る。彼は東京中央郵便局の葉書、手紙の検閲現場(写真1)で10名ほ

どの日本人検閲者のチームを監督、統括するDAC(副検閲監督官)兼Tech Expであった。上の表に見られるように、給与は4110円から5280円、そして7970円へと高度インフレを越える右上がりの伸びを示している。

1949年9月期の名簿には掲載されていないので、退職期は1949年6月〜9月の間であると思われる、したがって彼の勤務期間は2年7ヶ月〜10ヶ月であった。

DACは検閲者とその日の郵便物を振り分け、「検閲要項」というマニュアルにしたがって問題のある箇所を英訳させるかどうかを判断し、部下が訳した英文をチェックし、上司のアメリカ人ACに渡す現場監督代理の専門職Tech Expであった。日本人では最高のポストにいた。

各職種の検閲者全員の給与が記載されていることもこの資料の特色である。平の検閲者でも大会社のサラリーマンよりも高給を得ていたし、能力に応じて定期的に昇給していた。DACは部下を査定

していたので、部下にとって怖い存在であった。DACの評判は一般検閲者からは悪かった。ともかくDACは精勤を求められ、高い英語力があっていたので、高い給与を得ていたのは当然とされた。

なお1948年6月、9月の名簿にはGHQへの採用日が記されている。キノシタのそれは1946年11月4日である。ただしいつDACになったかは分からない。

キノシタを木下順二と断定できなかったわけ

私は5年前にキノシタを著名な劇作家、進歩的評論家木下順二であると思った。外に同姓同名は見当たらないのだ。

私が開発したプランゲ文庫の20世紀メディア情報データベース <http://20thdb.gi> で「木下順二」で入力すると、木下が書いたか、彼について触れた38件もの雑誌記事が出て来る。掲載誌は多様である。その中の「夕鶴」や「山脈」は劇化され、評判となっていた。調べてみると、その頃明治大学文学部で講師をして

いたことも判った。劇作家、劇評家として売出し中で、とてもDACの激務をこなせないと速断した。

別のキノシタ資料の発見——CCD資料Ⅱ

最近になって所有するファイル群を見ていたら、キノシタの資料に出あった。

Transmittal of Personal History

Statement, 1947.8.15の資料(CISS749)

がそれである。その時期にアメリカンクラブ(GHQの日本人雇用機関)のCCD労務担当将校が米軍憲兵隊長に33名の検閲者の履歴確認調査を求めた資料である。すでに採用した人物の身元確認である。なぜ彼らが調査されたのか、その理由は個々には記されていない。これらの人物は当時、なんらかのトラブルを起こしたか、当局の注目を引いた人物であろう。資料IにキノシタのようにDACになった人物もいれば、調査後に名が出なくなった者もいる。

木下は1947年3月の雑誌『人間』に「風浪」、4月の『別冊文藝春秋』に

「赤い陣羽織」を出し、7月には新月社から『オセロウ』を刊行するなどかなり活発な活動をしていた。これら作品が検閲に出されたことで、キノシタがCCD内部で注視されたのであろう。しかし調査からCCDの任務に支障ないと判断され、結果として雇用は継続となったことが資料Iで確認される。

私自身による木下身元再調査

5年前に一端あきらめていた木下の足跡を洗い直す気力が湧いてきた。彼は1939年、東大文学部英文学科を卒業後大学院に進む。指導教官中野好夫の勧めで「鶴女房」や「彦市ばなし」などの『全国昔話記録』を材料とした作品を書いていたが、戦時下検閲を憂慮して公刊の機会を求めなかった。法政大学で英語の講師をしていたが、英語教育禁止措置でクビになり、長野県蓼科に疎開した山本安英の劇団グループと合流する時間が多かった。安英仲間と地元農民らの芝居を指導したり、農作業で食糧自給につと



写真2 信州蓼科で農作業する木下と山本安英—中夫の2人(1945年秋、『山本安英舞台写真集』写真館、未来社)

めたりした(写真2)。天皇の玉音放送は安英と一緒に銀座の街角で聞いた。

キノシタがCCDを退職したのは、ちょうど作品が評判となり、劇化が進みだした頃である。それまでの時期はCCDに朝から夕方まで勤め、その夜に演劇活動をしていたはずである。土日が休みであった。月二回の公休もあったらしい。一橋大学に通っていたある検閲者はウィークデーに一日休みを取り、土曜のゼミに出席しただけで、卒業論文をまとめた」と私に語った。別の日本女子大の検閲者

は昼間の時間を抜け出して、必須の授業に出席していた。DACにはこれら一般検閲者のように自由時間は捻出しにくかったであろうが、その任務と作家活動をそつなくこなせる実務能力、処世術が木下には十分あったと思われる。

飢えを救ったGHQの給与

木下は熊本の大地主の息子であったが、戦前父親からの相続を拒否していたため、大宰治のような「斜陽」の苦労は体験しなかった。戦前に本郷に家屋敷を親が持っていた。東大YMCA寮に学生時代から住んでいたので、安い寮費で過ごせた。明治大学講師として多少の収入はあるにはあった。原稿料も若干あったろう。私の予想に反し、CCD勤務までの木下には自由の時間が多かった。明大も1947年5月から「戯曲論」週1コマ(90分)の非常勤講師であった。1949年に『夕鶴』刊行のためにYMCA寮で未来社を立ち上げた西谷能雄は木下の参加した座談会で「木下さんはまだ無名

人だった」、「木下さんも当時はそれほど目立ってはいなかったように思いますね」(未来社編刊『ある軌跡—未来社15年の記録』1967年)と語っている。

彼の記述には大多数の都会人が体験した死ぬほどの飢えと空腹でもがき苦しんだというものがない。それでも彼自身の飢えを凌ぐ収入をある程度あげねばならなかったはずである。GHQの給与は魅力的であった。朝日新聞社や三井信託銀行に転職した検閲者の話では、CCD時代の方が高給であった。妹や弟の学資を親代りに負担できたという美談もある。

木下と安英の愛を支えたもの

木下の甥であった不破敬一郎(元東大名誉教授)によれば、東大を卒業頃までには、彼と安英が「極めて親密な仲」になっていた。8歳年上の安英が、「結婚の相手としてではなく、むしろそれ以上の対象として強く存在していた」。両親がもち出した見合い話に対して、答えは素気なく「否」であった。安英の話を

った彼の母親の驚きと悲しみは、十年前の跡つき拒否の時よりも数段大きかったという(木下順二と山本安英(一))『図書』2009年2月号)。

『婦人公論』記者だった三枝佐枝子は1948年にYMCA寮を訪ねて、『夕鶴』を同誌に掲載することになった。三階の部屋は狭くて男くさく、ゴタゴタしていた。彼は「ほとんど無名に近かった」。「多年の年月を経て、育てあげたこの『夕鶴』は、いわば、木下氏と山本さんとていつくしんだ子どもであった。最近サルトル、ポーアールの両氏の来日によって、このふたりの知識人の愛の形が、理想の男女の姿であるとして話題にされたが、私は日本にもこのようなカップルがあるとすれば、それは私の知っている限りでは、木下、山本両氏のほかにないと思われるのである」(『夕鶴の世界』第二次総合版)未来社、1984年)。

私は安英をしたって全国から集まった若い俳優志望者の会「ぶどうの会」の活動資金の捻出に苦勞する彼女の支えに彼の給与の一部が流れていたと推測する。

安英は彼らと「それぞれ激しい生活苦と闘ひながらも二年ほど続けられた頃、前から面倒を見て下さっていた木下順二さんや、また山田肇さんの発議で、放送局の御好意の下にこのグループとして初めて対社会的な仕事をさせて頂くことになりました。木下さんが書いて下さった十回連続の学校放送を、山田さんの演出で」戦後の活動を本格化することが出来たことを感謝している（山本安英『歩いてきた道』未来社版62頁）。

彼は山本安英への援助を強い意志と情熱で実行したようである。そうすると講師料や原稿料では追いつかなかった。そこでGHQへの勤務を選んだ。

安英と木下は運命共同体で信頼し合っていた。「ぶどうの会」は木下との関係で戦後も東大YMCA寮を活動の拠点とした。木下は相変わらずその寮に住み続けて支援していた。

木下の検閲に向く性向

松本昌次『わたしの戦後出版史』（ト

ランスビュー、2008）には興味深い松本へのインタビュー談が収録されている。

「作家でフランス語がいちばんできるのは中村光夫さん、イギリス語では木下順二さんだと、だいぶ昔のことですが、だれかに聞いたことがあります。たとえば日常会話でも、横文字の発音に木下さんはきわめて厳密で、日本語なみに「マクベス」なんて平坦に言ったりすると、必ず「アクセントが違う」と訂正されるんです（笑い）。だから、木下さんの前では、決して横文字をしゃべらないと決めてたんですけど（笑）、うっかり出てしまっただけ、そのたびに訂正される。横文字の発音ばかりでなく、読んだ本の誤植は、そのページを見返しにメモしていましたね。若いときは、道を歩きながら広告のミスを発見すると、いちいち訂正を書き込んだと言われています（笑い）。それほど外国語であれ、日本語であれ、言葉に厳密な方でしたね」（168-19頁）。

この偏執ともいえる誤植発見への執念は少年時代からあったことを別のところで彼自身が語っている。多くの検閲者が

CCDでの自らの体験を苦痛と語っている。彼の部下の回顧録はどこにも見当たらないが、DACとしての彼からの厳しい注意や叱責を受け、彼を忌み嫌っていたと思われる。一方彼はその任務を楽しんでいたのではなからうか。そしてその行為が上司に評価され、優遇されるのにつながったことであろう。CCD時代のDACとしての言動が退職後も継承されていたことが分かる。持って生まれた性向が占領期に「習い性」となったわけだ。

木下は検閲体験の秘密保持の防衛体制を作っていた。一切彼の著述に反映させなかった。彼のCCD勤務を一番知っているはずの安英にも語らせなかった。そういうえば先に出した安英の自伝『歩いてきた道』の引用箇所が1964年の未来社版のみに掲載され、その後の未来社版、中公文庫版などからは削除されている。それは木下の指示によるものだろう。しかし周到に隠していたものが無意識に松本ら周辺の人たちに表出していた。それはCCD勤務を「語るに落ち

る」証拠であった。

進歩的文化人のアメリカ抜き の体制批判

彼の著作集、評論集は未来社から、また岩波書店、筑摩書房などから多数刊行されている。私も大学入学以来、安保問題、アジア問題、中国問題、朝鮮問題さらには沖縄問題での多彩な彼の言動に時おり接していた。今回それらを読み直してみても分かったのは、そこには直接的なアメリカ批判がまったくないことである。日本の保守陣営や軍指導者の戦争責任追及は厳しいが、アメリカ指導者やマッカーサーの名が出てこない。占

領期の米軍の出来事は例示されない。アメリカにかかわる用語は慎重に排除している。東大Y M C A寮を中心に戦前のプライバシーをさらけ出した自叙伝『本郷』に比べて、占領期の記述は稀少だ。彼が占領期の体験を語るとすれば、極端に言えば、新劇界や「ぶどうの会」だけである。

劇作品でもそうである。『沖縄』ではさすがにアメリカ軍の軍用地強制収容の話はでるが、日本本土の人間（ヤマトンチュウ）と本土資本の沖縄人暴行と収奪が主題となっている。日米安保体制批判はない。『蛙昇天』や『オットー』と呼ばれる日本人』ではソ連の工作の話が出る

ため反ソ的に見えるが、やはり悪人は日本の旧軍人や保守政治家の体制である。連合軍の一員であったソ連批判は露骨ではない。彼は戦前、東大Y M C Aの一員として渡米するほどのアメリカへの関心が強かったにもかかわらず、戦後一度も渡米していない。1955年アジア・アフリカ各国、欧州を外遊したり、国交のないソ連、中国、さらには北朝鮮にまで足を伸ばしていたことと比べれば異常である。

私が接触したかぎりCCDから退職時に沈黙を強制されたとか、その後の行動を監視されたとかいう元検閲者はいない。旧敵国に雇われて同胞を監視した

前川恒雄と

滋賀県立図書館の時代

田井 郁久雄 著

四六判・248頁
定価 本体 1600円+税

ISBN978-4-7852-0163-0

第一部 若き日の前川恒雄

三〇歳前までの歩み

第二部 前川恒雄と滋賀県立図書館

図書館づくりは「人」。前川恒雄の実践と理論は、公立図書館の原点としていまなお検証する意義を持つ。公立図書館の発展に大きな役割を果たした前川の足跡を、インタビューを中心にした記録に残す。

出版ニュース社

東京都千代田区神田神保町2-40-7
電話03-3262-2076 FAX03-3261-6817
HOMEPAGE: <http://www.snews.net/>

り、高給に惹かれて憲法違反、倫理違反の信書開封、情報窃取行為でGHQに協力したりしたことを恥辱として感じて沈黙する検閲体験者は少なくない。一方ではその体験を高給アルバイト体験、楽しい青春の米国風職場としてあけすけに語る人もいる。

木下は緘黙派である。彼の行為は違法ではない。ただ彼はすばらしい英語力で日本人検閲者の英訳作業を管理し、結果として白人将校のご機嫌をとっていたことを恥じていたのではない。しかも独立後の言動で日本権力批判を行うとなれば、権力側と組んだアメリカへの批判に連動する。つまり反米活動につながることは論理的に導かれる。そうすると彼の体制批判は中途半端となる。DACとしての占領期での行為をアメリカに暴露されれば、彼の戦後築いた進歩的文化人や作家としての地位や名誉が失われることを恐れて沈黙したのかもしれない。ともかく彼は検閲体験を隠し通す。『閉ざされた言語空間』で検閲体験者を糾弾する江藤淳を恐れて一層殻にこもったのかも

しれない。

松本昌次の証言

誕生初期の未来社に1953年に入社以降、木下の数多い著作の編集担当者となり、晩年の木下に関する自身の著作と

お願い

た検閲者名簿（日本名と住所）を所蔵しているにも関わらず、2014年、私の出したその名簿の情報公開請求を拒否している。

私は自身の力で木下DAC説の裏付けを十分にえることが出来ていない。松本証言で自信を得たものの、本稿では状況証拠でしか説明できなかった。木下は歴史的に意味ある足跡を残した時代の有名な人である。多様な個人情報を入力して、その実像を復元することに研究意義を感じる。私の作業は彼の業績を貶めていないと思っっている。

ただ今回の発表で、多くの意見や情報をひろく求め、それらを反映したものを次の機会にまとめたい。傍証、反証なんなりとも読者の皆様からお伝えいただくことを切望している。また存命の検閲者からの体験談や情報を期待している。
(敬称略)

誕生初期の未来社に1953年に入社以降、木下の数多い著作の編集担当者となり、晩年の木下に関する自身の著作と持つ松本昌次は2018年2月、3月の私の電話取材で、若い作家やぶどうの会の人から「木下がGHQで検閲をやっていた」と聞いたことを想起してくれた。木下は何事につけ自ら語ることがない慎重な性格の人物であったという。加えて「当時、木下順二という人物は他にいなかった。そのGHQ資料に出るキノシタは木下順二で間違いない」と。たしかに20世紀メディア情報データベース(<http://20thdb.jp/>)では「木下順二」は彼一人であることが確認できる。

木下はCCD勤務を隠蔽したと思ってこの世を去った。だがアメリカ国立公文書館は彼の名を記したCCD資料を公開していた。

日本政府（日本年金機構）は彼を含め